

シリーズ

“キラリ企業”の現場から 第17回

公社のさまざまな支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業の現場から”。第17回目は、東京都の伝統工芸品に指定されている「東京銀器」を製作する、有限会社日伸貴金属を紹介します。今まで「にぎわい粋いき台東産業ルネサンス」（都立産業貿易センター台東館）や、「伝統工芸品チャレンジ大賞」（城東支社）、若手商人育成事業の若手商人研究会（城東支社）への参加などを通じて公社をご利用いただき、現在は「地域資源活用プログラム」の活用について総合支援課でサポートしています。

地域資源の新たな活用に取り組む ～東京銀器～

有限会社日伸貴金属

日本古来の伝統を今に伝える職人

新御徒町と蔵前の駅の間位置する、小さな工房が集まる台東区三筋地区。三つの町と三条の道を造ったことから三筋と呼ばれるようになった歴史あるその街に、有限会社日伸貴金属は工房を構える。同社は昭和39年上野桜木で創業。その後、東日暮里への移転を経て台東区三筋に移り、現在に至る。同社を訪問すると、代表の上川一男氏が迎えてくれた。まさに、「いぶし銀」の江戸っ子という雰囲気がある。

一男氏は、昭和36年に父親である先代に師事し、16年の修行を経て、昭和52年同社の代表取締役就任した。その後、経済産業大臣指定の伝統工芸品東京銀器伝統工芸士の認定を受け、技能に関するさまざまな賞を受賞するなど、輝かしい経歴の持ち主である。

また、こうした卓越した技能を持つだけでなく、同氏は時代の流れを正確に感じることでできる経営者でもある。



鍛金の作業をする同社代表の上川一男氏

日本における銀器の歴史

「東京銀器」は、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律(伝産法)」に基づいて、昭和54年に国から指定を受けた名称である。

我が国における銀器の歴史は古く、平安時代に作られた律令の施行細則を記した延喜式（927年）の中に、銀製の食器や酒器の名を見ることができる。また、江戸中期に公布された「徳川禁令考」によると、かんざしや櫛、キセルなどに金、銀の使用を禁じたお触れが、寛政元年（1789年）に出たことなどから、当時町人の間でも銀器、銀道具が広く使用されていたことがうかがわれる。

現在、銀器は東京が主要な産地であり、鍛金（打ち物）、彫金（彫刻）、切嵌め、鑲付けの4つの技法で、装身具や各種置物などが作られている。

時代の変化に対応した魅力ある銀器づくり

一男氏やご子息に、製品（というよりむしろ作品と呼んだ方が正確かもしれない）や、工程の一部を見せていただいた。銀器というと金槌で叩いて1枚の銀板から作品をつくる作業がイメージされるが、鍛金、彫金、ヘラ絞りときさまざまな技法を駆使して作られる。製作点数が多いものはさすがにプレス加工だが、「手作り感が大事」という顧客も多く、その場合は一つの作品にかかる時間が数ヶ月から1年ということもある。

驚くことに、加工のための工具も自ら作っている。一男氏いわく「工具が作れないと一人前の職人にはなれない」。銀器製作には、汎用性のある既存の工具がもともとあるのではなく、一から工具を作ったり、以前作った工具をもとにさらに改良を加えることもある。無論、初めから工具を作れるわけではなく、最初は師匠や兄弟子が使っていた工具を借りて既存の製品を作るところから入る。その経験をもとに新しい作品、そのための工具作りへと進む。



同社で製作した仏具のお鉢

伝統工芸といっても全てが手作業ではなく、現在はヘラ絞りやバフ研磨など、ある程度機械化もされている。こうした機械を導入することで、以前よりも製作にかかる時間が短縮でき、さらに色々な細工ができるようになったという。昔からのやり方がそのまま引き継がれているだけでなく、さらに進化しているのだ。

伝統を引き継ぐこの業界にもやはり流行り廃りがあり、それに対応できないと事業の継続も難しい。例えば最近、純金製のお鈴（寺などに置いてある金属性お椀状のもの、鈴棒で打つとチーンと鳴るもの）が流行している。同社のこの製品は、一度叩くと驚くほどに長く響く。一男氏の作るものには製法に秘密があり、それが長く音を響かせる仕組みになっている。

しかしこのような新しいデザインやコンセプトの製品を作っても、大手が量産による低コスト化で追いかけてくる。同社は、それに先駆けて独自のものを作り続けていくことで顧客を開拓している。

「うちはニッチ（隙間）を狙っていく産業ですから」とは、一男氏の言葉である。

若い世代への事業と技能の承継に成功

現在、中小企業では事業承継の問題が深刻となっているが、同社は、事業承継に成功しているケースである。現在は父親である一男氏を代表として、三男一女の4人が同社の事業に従事している。従来の、ひたすらモノをコツコツ作る職人のイメージとは異なり、彼らはデザインも営業も製作もこなしている。

だが、技能の面では、まだまだ父親にはかなわず、一男氏だと1日で完成する作品でも、ご子息ではその数倍時間はかかるという。芸術家ではなくビジネスでやっていくには納期の関係上ある程度のスピードも要求される。さらに技能を磨き、一男氏のレベルに追いつくことが、同社の承継者にとって今後の目標となっている。



一男氏と後継者の子息子女

「地域資源活用プログラム^(注1)」への取り組み

このように、自社レベルでの事業承継は問題ないが、一男氏は業界全体の将来に危機感を抱いている。所属する東京金銀器工業協同組合でも、他の伝統工芸品産業の例に漏れず高齢化と承継者の不在が急速に進んでおり、若手の組合構成員は数人しかいない。

従来のように、丁寧な仕事をしていいものを作れば売れる、という時代ではない。

そこで、「自社が新しい事業の展開をすることで、業界全体の活性化につながれば」という一男氏の強い思いから、同社は、今年度の「地域資源活用プログラム」の事業計画の認定を受けるために走り出している。「地域資源活用プログラム」とは、平成19年に国が創設した支援策で、地域産業資源を活用した中小企業による新商品、新サービスの開発、市場化を支援するものである。

同社は、「伝統の技術」を生かしつつも、「新しい素材」と「デザイン」で勝負するという。「欧米にも銀加工はあるが^(注2)、繊細な細工なら十分勝負できる。」と、一男氏は、視察で見た海外の銀製品との競争にも自信を見せた。

「この業界はマーケティングの観念が薄かった。問屋から仕事を受けて、言われたとおりのものをつくる仕事をしてきたが、このままじゃダメだと思っています」と一男氏は言う。

脈々と受け継がれてきた技法に若き後継者の新しいセンスが融合したときに、さらに同社は発展するだろう。今後公社として地域資源の活用に留まらず、さまざまな支援を行っていきたい。

(総合支援課 河邊三鶴)

(注1) 当シリーズの第10回で掲載された華硝（工房 熊倉硝子工芸）がこのプログラムで認定された都内で第1号の企業である。「地域資源活用プログラム」は、個々の企業でなく、1つの地域、1つの業界全体に経済的波及効果が期待される新商品開発等に対しての補助金交付等さまざまな支援の制度がある。

(注2) 東京銀器では純度92.5%以上のものを使用しているが、欧米ではスターリングシルバー（銀92.5%）で表面にあまり加工をしないものが主流。

企業名：有限会社 日伸貴金属

代表者：上川 一男 資本金：300万円 従業員：5名

本社所在地：東京都台東区三筋1-3-13

T E L : 03-5687-5585

F A X : 03-5687-5679

U R L : <http://www21.big.or.jp/~nisshin/>